

**携帯電話用周波数の再割当てに係る  
円滑な移行に関するタスクフォース**

# **実機検証の結果**

**株式会社NTTドコモ**

**2022年10月21日**

# 1. はじめに

---

- **基地局受信フィルタ有無によるお客様影響**について、端末の使用形態や位置、送信帯域幅等の様々な条件において、**800MHz帯基地局装置を用いた実測**により評価を実施しました。

## 2 - 1. 評価内容

- 評価内容は、端末の位置（セル全体およびセル端）、端末の送信帯域幅（1RB※またはフルRB）を勘案し、以下の表の通り、様々な条件を評価するシナリオで実施しました。

※ RB (Resource Block)

			他社端末の状況(被干渉基地局に近いもの)	
			狭帯域通信(1RB等)	広帯域通信(フルRB等)
被干渉側 端末 の状況	被干渉側 基地局との位 置に無関係 (セル全体)	狭帯域通信	(A-1) →①が最も厳しい条件であるため評価省略	(A-2) →①が最も厳しい条件であるため評価省略
		広帯域通信	(A-3) →①が最も厳しい条件であるため評価省略	(A-4) →実測評価シナリオ①
	被干渉側 基地局に遠い (主にセル端)	狭帯域通信	(B-1) →実測評価シナリオ②	(B-2) →実測評価シナリオ③
		広帯域通信	(B-3) →実測評価シナリオ④	(B-4) →実測評価シナリオ⑤

# (参考) 実測評価シナリオ (想定パターンと省略理由：セル全体)

		他社端末の状況(被干渉側基地局に近いもの)	
		狭帯域通信(1RB)	広帯域通信(フルRB)
被干渉側端末の状況 (セル全体)	狭帯域通信	<p>(A-1)</p> <p>A-4と比較して希望波(1RB)がリソースマネージメントにより干渉を受け難い帯域での通信が可能。希望波が全ての帯域を使用し、干渉を受けやすいA-4がより厳しい条件となるため評価を省略。</p>	<p>(A-2)</p> <p>A-4と比較して希望波(1RB)がリソースマネージメントにより干渉を受け難い帯域での通信が可能。希望波が全ての帯域を使用し、干渉を受けやすいA-4がより厳しい条件となるため評価を省略。</p>
	広帯域通信	<p>(A-3)</p> <p>A-4と比較して干渉波(1RB)の隣接帯域への影響は小さい。また、干渉を受ける範囲が狭く、干渉影響は誤り訂正により影響が低減されるため、干渉を受けやすいA-4がより厳しい条件となるため評価を省略。</p>	<p>(A-4) 実測評価シナリオ①</p> <p>両端末が、各基地局に近接し、高速通信(フルRB)を実施しているシナリオ。</p>

# (参考) 実測評価シナリオ (想定パターン：主にセル端)

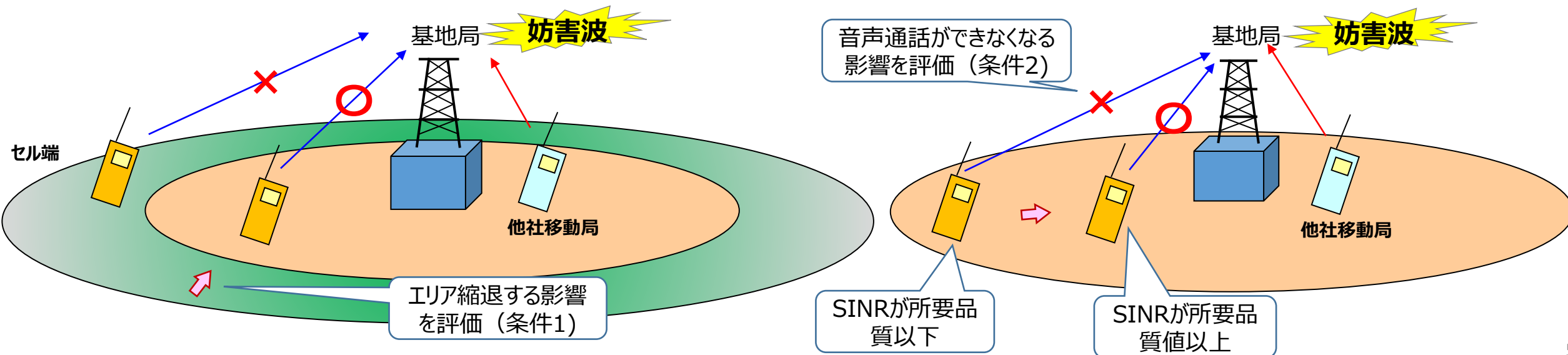
		他社端末の状況(被干渉側基地局に近いもの)		
		狭帯域通信(1RB)	広帯域通信(フルRB)	
被干渉側端末の状況 (主にセル端)	狭帯域通信	<p><b>(B-1) 実測評価シナリオ②</b></p> <p>被干渉側移動局</p> <p>被干渉側基地局 抑圧 1RB</p> <p>他社移動局</p> <p>他社基地局</p> <p>両端末が、各基地局のセル端に存在し、低速通信(1RB)しているシナリオ。</p>	<p><b>(B-2) 実測評価シナリオ③</b></p> <p>被干渉側移動局</p> <p>被干渉側基地局 抑圧 フルRB</p> <p>他社移動局</p> <p>他社基地局</p> <p>他社端末は基地局に近接し高速通信(フルRB)を実施し、被干渉側端末はセル端で低速通信(1RB)しているシナリオ。</p>	
		<p><b>(B-3) 実測評価シナリオ④</b></p> <p>被干渉側移動局</p> <p>被干渉側基地局 抑圧 1RB</p> <p>他社移動局</p> <p>他社基地局</p> <p>他社端末はセル端に存在し低速通信(1RB)を実施し、被干渉側端末はセル端で高速通信(フルRB)しているシナリオ。</p>	<p><b>(B-4) 実測評価シナリオ⑤</b></p> <p>被干渉側移動局</p> <p>被干渉側基地局 抑圧 フルRB</p> <p>他社移動局</p> <p>他社基地局</p> <p>他社端末は基地局に近接し高速通信(フルRB)を実施し、被干渉側端末はセル端で高速通信(フルRB)しているシナリオ。</p>	
	広帯域通信			

## 2-2. お客様影響の評価

- 妨害波による**データ通信への影響**（条件1：B-1～4）と**音声通信への影響**（条件2：A-4）を実測評価し、通信品質劣化を被る端末比率を、**フィルタ有無で比較し、端末比率差分をお客様影響として評価**しました。

条件	端末の位置	評価値 (BLER)	評価内容
条件1	被干渉側基地局に遠い (主にセル端)	5%, 20%	受信感度付近で <b>データ通信</b> している端末において、基地局への妨害波入力により <b>受信感度の劣化</b> が発生し、 <b>エリア縮退</b> する影響を評価
条件2	被干渉側基地局との位置 に無関係(セル全体)	1%, 10%	所要受信SINR付近で <b>音声通信</b> している端末において、基地局への妨害波入力により <b>SINRの劣化</b> が発生し、 <b>通話ができなくなる</b> ※影響を評価

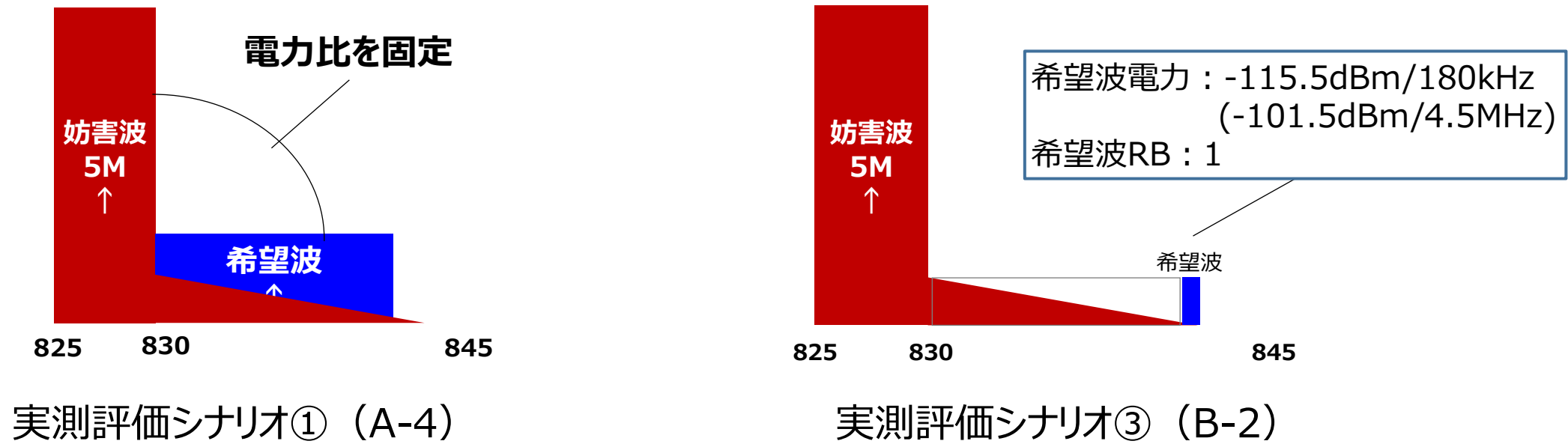
※「通話ができなくなる」とは、発信の失敗や通話中の場合には音声の途切れ、通信の切断等の事象を示す。



### 3. 評価結果で説明するシナリオ

- 評価結果について、以下では、代表的なシナリオについて説明します。
  - ✓ **セル全体の被干渉端末の影響評価**： 実測評価シナリオ① (A-4)
  - ✓ **セル端の被干渉端末の影響評価**： 実測評価シナリオ③ (B-2) ※1

※1 本シナリオ (B-2) は、B-1～B-4の実測評価シナリオにおいて、リソースマネージメントにより不要発射の影響を回避できず、また帯域全体での誤り訂正効果が期待できない最悪ケースであるため、本シナリオ (B-2) を用いてセル端の被干渉端末の影響評価を実施しました。

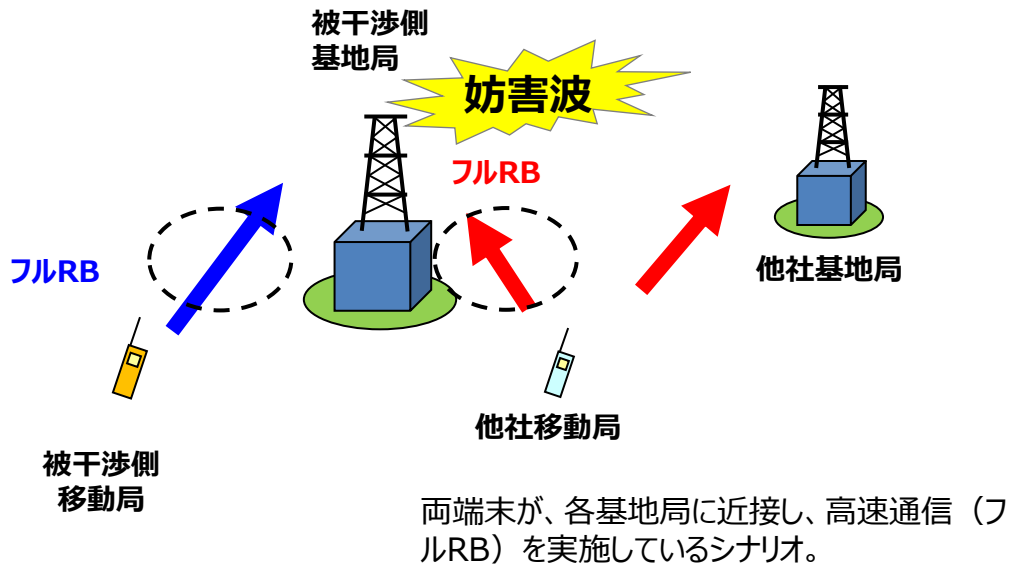


※2 B-1の結果は参考2、B-3の結果は参考4、B-4の結果は参考5に記載しました。

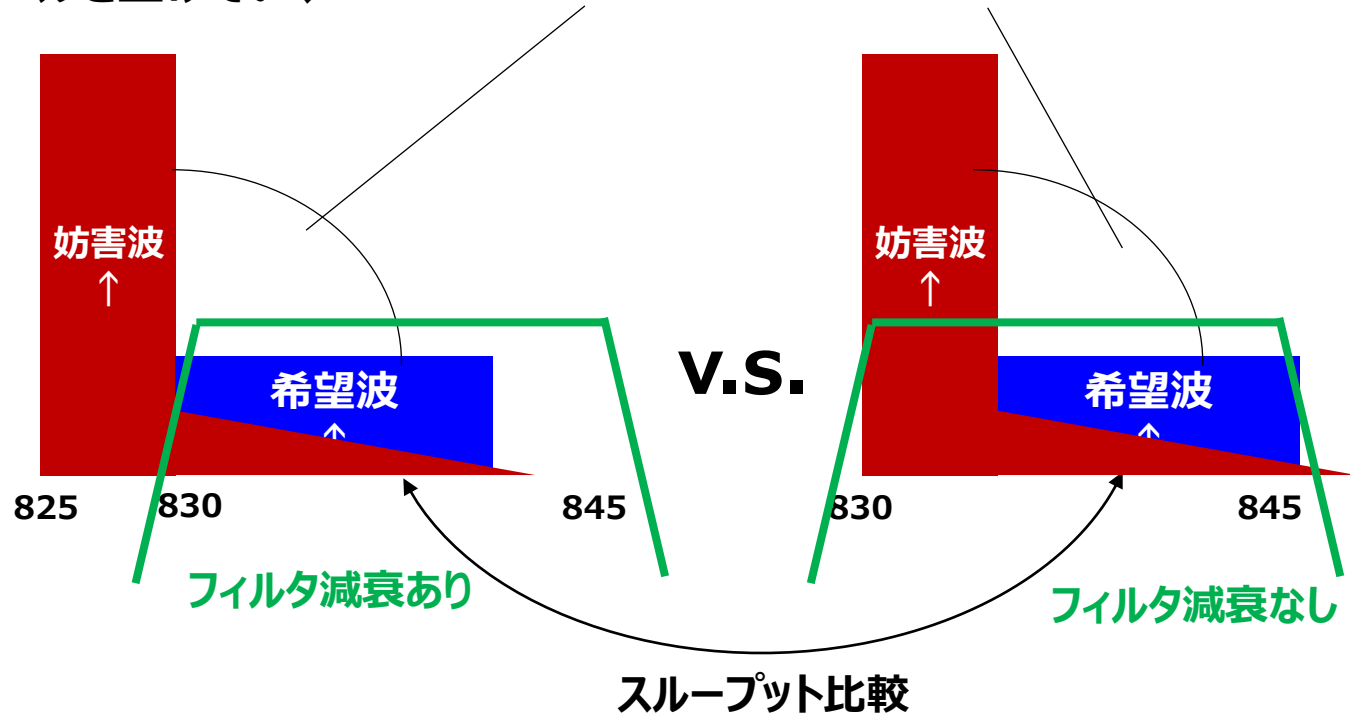
# 4-1. セル全体の被干渉端末の影響 (A-4) 評価内容

- セル全体の被干渉端末の影響を、以下のシナリオに基づいて評価しました。

## 実測評価シナリオ① (A-4) シチュエーション



電力比を固定(3GPP ACS<sup>※1</sup>の43.5dB等<sup>※2</sup>)して、同時にレベルを上げていく



※1 ACS (Adjacent Channel Selectivity) : 隣接チャネル選択度

※2 電力比が35dB、76.5dBの結果は、参考1に記載



## 4 - 2. セル全体の被干渉端末の影響 (A-4) 評価結果 (1 / 3)

- 希望波と妨害波の電力比を固定して、妨害波電力を変化させた場合のスループットの劣化量について評価を実施しました。

【希望波と妨害波の電力比 : 43.5dB】



- 希望波と妨害波の電力比が43.5dBの場合、**フィルタ無し**の場合は、**妨害波電力が-41dBm以上の場合にスループットが低下します。**
- 一方、**フィルタ有**の場合は、**スループットの低下は見られず、フィルタの効果により、妨害波への耐性が6dB向上します。**

## 4-3. セル全体の被干渉端末の影響 (A-4) 評価結果 (2/3)

- 音声通信に係るお客様影響の算出のため、音声品質の評価指標として前述のスループットの劣化量 (BLER=1%、10%) を用い、妨害波電力に対する音声通信の所要SINRの劣化量を評価しました。  
【条件2 (音声通信影響)】

【BLER = 1%の場合のSINR劣化】

非開示資料

【BLER = 10%の場合のSINR劣化】

非開示資料

- 妨害波電力が-40dBmの場合、フィルタ無しで音声通信するためには、フィルタ有に比較して7dB高い品質が必要です。
- 妨害波電力が-40dBmより大きい場合、フィルタ無しでは装置が妨害波に耐えられないため、全端末で音声通信できなくなりますが、フィルタ有では、音声通信が可能となります。

## 4-4. セル全体の被干渉端末の影響 (A-4) 評価結果 (3 / 3)

- 妨害波電力が-40dBm及び-35dBmの場合に着目し、前述の音声通信の所要SINRの劣化量を用いて、**お客様影響**を、各基地局において**音声通信ができなくなる端末比率**の累積分布として評価しました。

【条件2 (音声通信影響)】

【妨害波電力：-40dBmの場合】

非開示資料

【妨害波電力：-35dBmの場合】

非開示資料

- 妨害波電力が-40dBmの場合、中央値で評価した結果、**フィルタ有の場合には音声通信できないセル内の端末の割合は0**であり、品質劣化は発生しません。一方、**フィルタが無い場合には、フィルタ有に比較して、20%多くの端末が音声通信できなくなります。**
- 妨害波電力が-35dBmの場合、**フィルタが無い場合には、装置が妨害波に耐えられないため全端末が音声通信できなくなりますが、フィルタ有の場合は、90%の端末で音声通信が可能となります。**

# (参考) 音声通信ができなくなる端末比率の累積分布の算出手順

音声通信ができなくなる端末比率の累積分布は、以下の手順で算出しています。

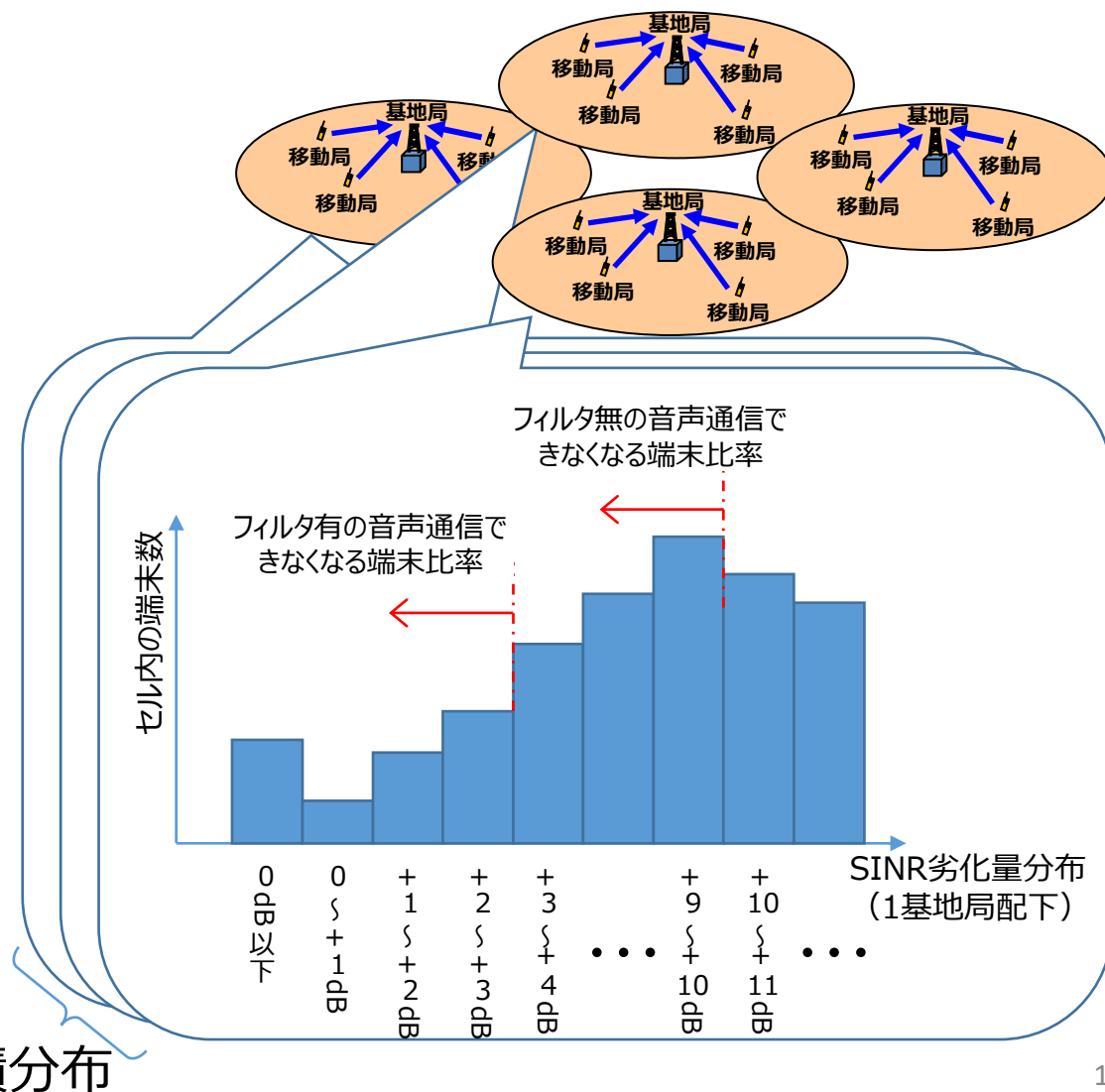
【妨害波電力-40dBmが入力された場合の例】

① 基地局に妨害波電力-40dBmが入力された場合の実証結果 (P9) から、音声通信に必要なとなる所要SINRの劣化量を算出

- ・フィルタ有：SINRの劣化量は約3dB
- ・フィルタ無：SINRの劣化量は約10dB

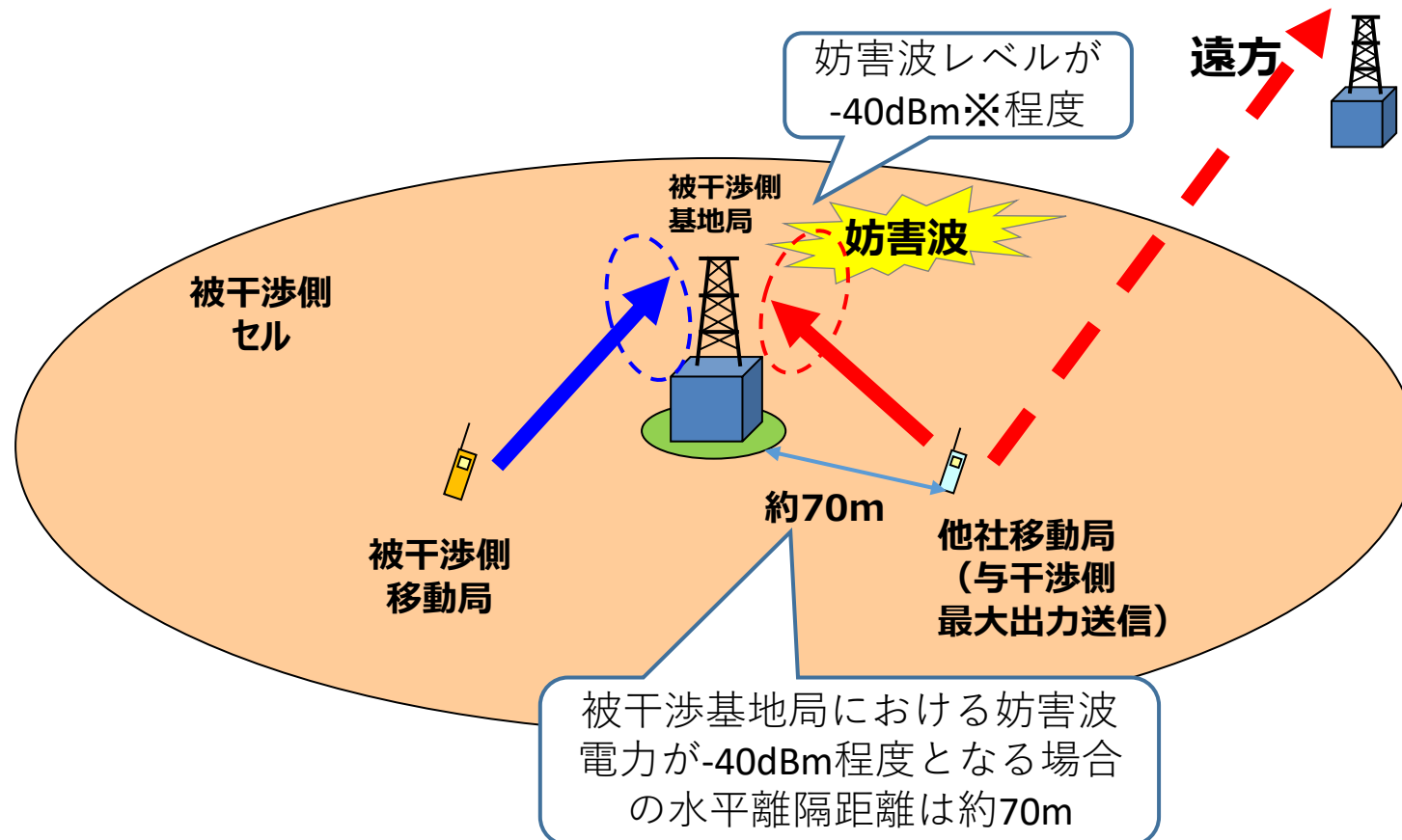
② 運用ネットワークで観測された「実モニタリングデータ」である各セルのSINR劣化量分布 (右図) を用いて、各セル内に存在する端末の中で、①のSINR劣化量以下となる端末比率 (すなわちセル内で音声通信ができなくなる端末比率) を算出

③ ②で得られた各セルの端末比率の分布を用いて累積分布を算出



## 4-5. 妨害波が-40dBm以上となる場合の事例

- 妨害波の電力が-40dBm以上で被干渉側基地局に入力されるケースは、他社移動局が最大出力等の高い電力で送信し、かつ、被干渉側基地局と70m以内に近接する場合です。
- 実モニタリングデータにより、**他社移動局の妨害波が-40dBm以上で被干渉基地局に入力されるケースに遭遇することを確認**し、フィルタが無い場合にサービス影響が発生する可能性があることが分かりました。



※ 基地局高：40m、移動局高：1.5m、移動局最大電力：23dBm、周波数：835MHz、伝搬モデル：拡張秦Urbanモデル、基地局アンテナ利得：17dBiより算出

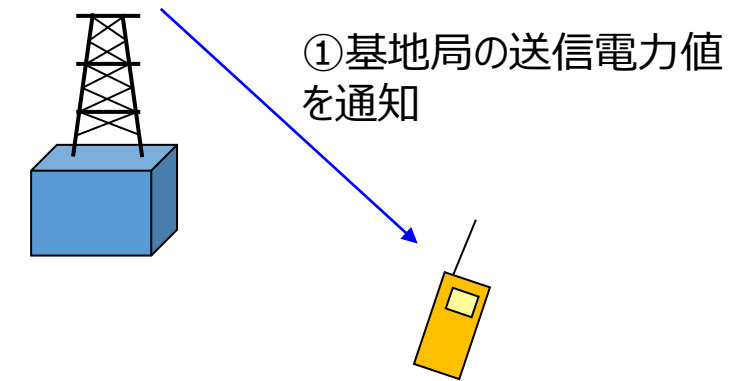
## (参考) 妨害波-40dBm以上の確認手順

- 妨害波が-40dBm以上で入力されるケースについて、以下の手順で確認しています。

端末が最大送信（23dBm）すると仮定した場合に、基地局において-40dBm以上で受信されるケースは、パスロス（アンテナ利得、シャドウイングや人体損含）が63dB以下のケースです。

パスロスは、運用ネットワークで観測された「実モニタリングデータ」を用いて、右図の①～④の手順で算出しています。

実モニタリングデータから算出したパスロスが63dB以下のケースに遭遇することを確認しました。



- ②端末は送信電力値を取得
- ③端末は受信電力を測定
- ④パスロス = 送信電力値 - 受信電力を計算

- 妨害波が-40dBm以上で入力されるケースは、以下の理論式から被干渉側基地局と**70m以内に近接**する場  
合です。

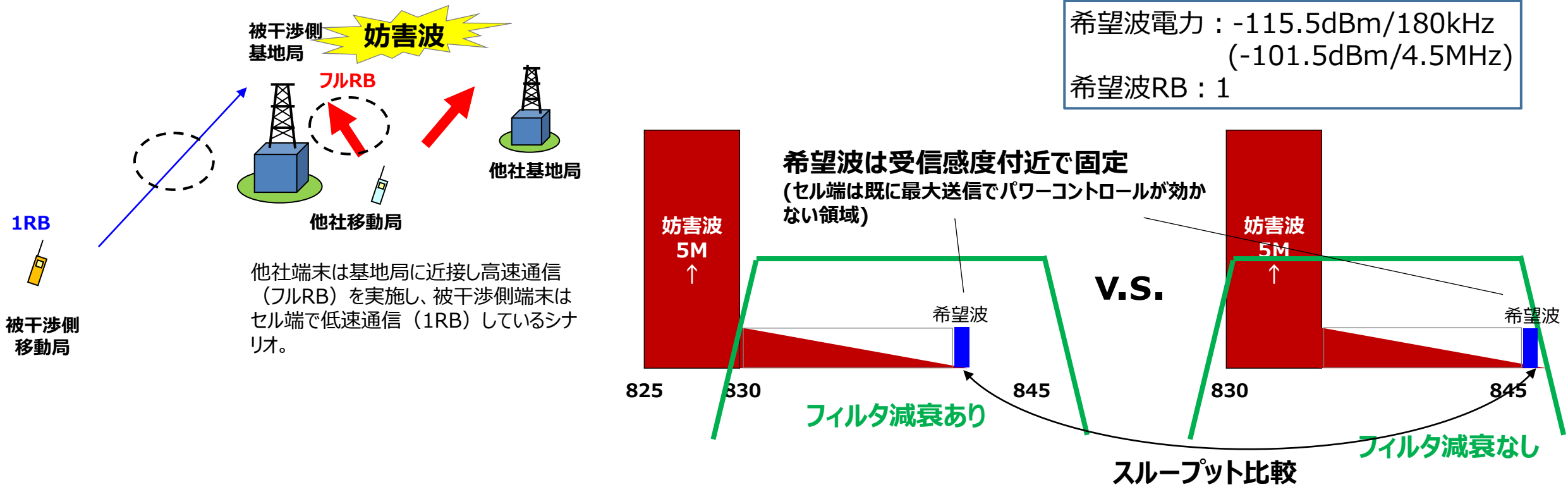
被干渉側基地局に入力される妨害波電力が-40dBmとなる場合の伝搬損失は、下記の諸元より、約80dBとなります。 $((23\text{dBm} + 17\text{dBi}) - (-40\text{dBm}) = 80\text{dB})$

伝搬損失が80dBとなる基地局と端末の離隔距離を、**拡張秦式（Urban）モデルの理論式**より計算し、約70mを算出しています。

# 5 - 1. セル端の被干渉端末の影響 (B-2) 評価内容

- セル端の被干渉端末への影響を、以下のシナリオに基づいて評価しました。

## 実測評価シナリオ③ (B-2) シチュエーション



## 5 - 2. セル端の被干渉端末の影響 (B-2) 評価結果 (1 / 2)

- 希望波電力を受信感度点に固定し、妨害波電力を変化させた場合のスループットの劣化量について評価を実施しました。

非開示資料

- 妨害波電力が-60dBmを超えた場合、フィルタの有無に関わらずスループットが低下します。
- 端末がセル端に存在し、**希望波電力が受信感度点となる場合は、妨害波の不要発射の影響が大きい**ため、**フィルタの効果は見られません。**



## 5-3. セル端の被干渉端末の影響 (B-2) 評価結果 (2/2)

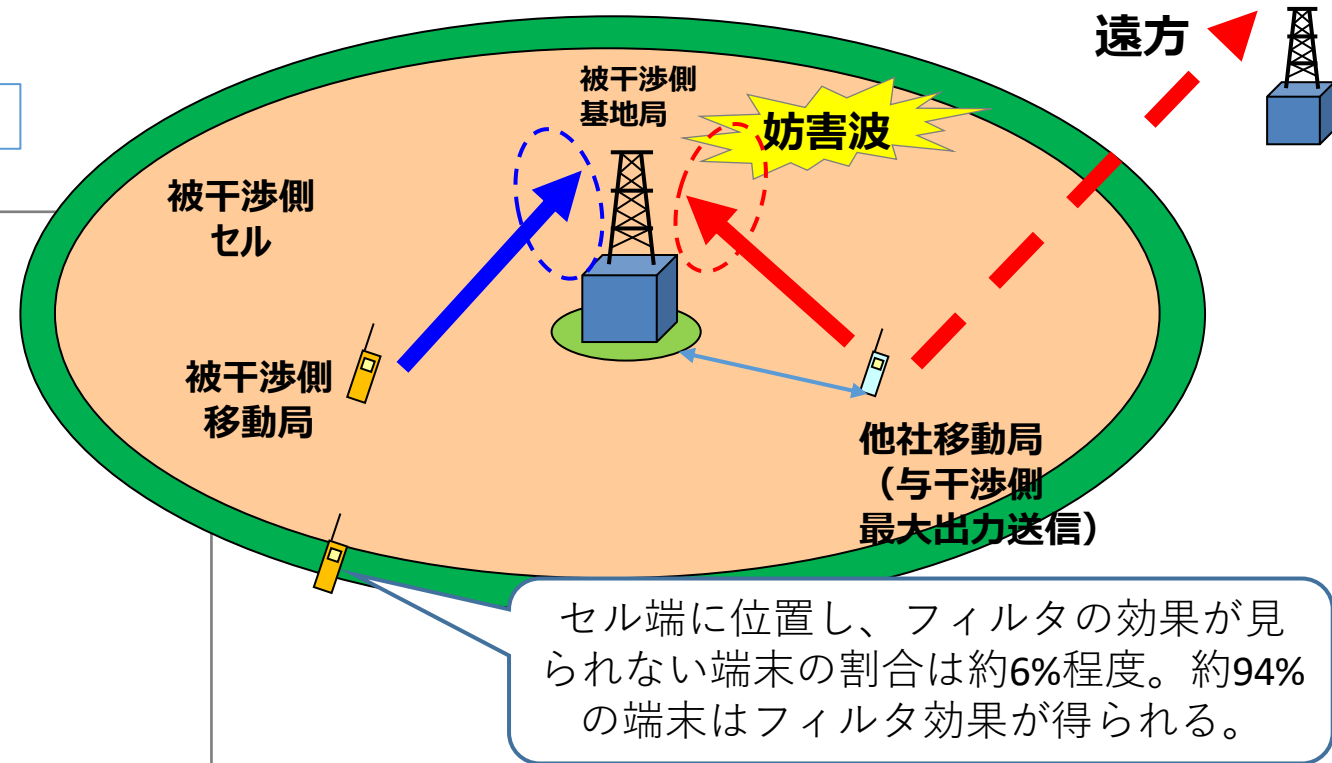
- フィルタの効果が見られないケースがどの程度の割合になるのか評価を実施しました。
- 本シナリオ (B-2) は、B-1~B-4の実測評価シナリオにおいて、リソースマネージメントにより不要発射の影響を回避できず、また帯域全体での誤り訂正効果が期待できない最悪ケースであるため、本シナリオ (B-2) を用いて割合を導出しました。

【条件1 (データ通信影響)】

受信感度：-115.5dBm/180kHzに対する劣化量

【BLER = 20%の場合の受信感度劣化】

非開示資料



- BLERが20%の場合、受信感度劣化が3dB以下では、フィルタの効果が見られません。
- 実モニタリングデータより、受信電力が受信感度から3dB高い値以下となる**フィルタ効果が見られない端末の割合は約6%**であり、残りの**約94%の端末はフィルタ効果が得られる**ことが分かりました。

## 6. まとめ

- 実証結果から、受信感度付近の**セル端の端末**は、感度抑圧よりも不要発射の影響を大きく受けて品質劣化するため、感度抑圧を低減する**フィルタの効果は無い**ことが分かりました。また、実モニタリングデータから、フィルタの効果が無いセル端の端末の比率は、**全体の6%**であることが分かりました（B-2の結果）。
- 一方、残りの**94%の端末（約8,000万台）**は、妨害波の電力が-43dBm以上になると、感度抑圧を低減するフィルタの効果が不要発射の影響よりも大きくなり、フィルタが無い場合に比較して、**フィルタが有る場合に良好な通信品質を実現**できることが分かりました（A-4の結果）。
  - ✓ 妨害波の電力が-40dBmの場合（他社端末が被干渉基地局に最大送信で約70mに近づいた場合）、**フィルタが無い場合には約20%の端末（1,700万台）が音声通信できなくなりますが、フィルタが有る場合には全ての端末で音声通信ができます。**
  - ✓ 妨害波の電力が-35dBmの場合（他社端末が被干渉基地局に最大送信で約55mに近づいた場合）、**フィルタが無い場合には全ての端末が音声通信できなくなりますが、フィルタが有る場合には約90%の端末（7,600万台）で音声通信ができます。**
- 以上の実証結果より、基地局に対して端末が70m以内に近接し、妨害波が-40dBm以上の電力で基地局に到達することは、実ケースとして存在し、**フィルタが無い場合にお客様影響が発生**することが分かりました。お客様影響はどの基地局においても発生し得るものであることから、発生確率で対策の必要性を判断するのではなく、発生し得るお客様影響に対して**基地局受信フィルタを挿入して対策することが周波数有効利用の観点で必要と**考えます。

## (参考) まとめ一覧

	被干渉側基地局との位置に無関係 (セル全体)	被干渉側基地局に遠い (主にセル端)
音声通信	<ul style="list-style-type: none"> <li>妨害波の電力が-40dBmの場合（他社端末が被干渉基地局に最大送信で約70mに近づいた場合）、<b>フィルタが無い場合には約20%の端末が音声通信できなくなる</b></li> <li>妨害波の電力が-35dBmの場合（他社端末が被干渉基地局に最大送信で約55mに近づいた場合）、<b>フィルタが無い場合には全ての端末が音声通信できなくなる</b></li> </ul>	<p>データ通信と同様に品質劣化する。音声通信は、データ通信に比較して<b>再送による遅延の影響が許容されない</b>ため、音声通信ができなくなる等、<b>データ通信よりも影響は大きくなる</b></p>
データ通信	<ul style="list-style-type: none"> <li>妨害波の電力が-40dBmの場合（他社端末が被干渉基地局に最大送信で約70mに近づいた場合）、フィルタが有りの場合はスループットが100%であるのに比較して、<b>フィルタが無い場合にはスループットは0%に低下する</b></li> <li>スループット低下（BLER増加）が発生した場合、<b>一定の通信が確保できるように再送制御がなされるが、再送が繰り返されることにより、不要なトラヒックの増加や伝送遅延が発生する</b></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受信感度付近の<b>セル端の端末</b>は、感度抑圧よりも不要発射の影響を大きく受けて品質劣化するため、感度抑圧を低減する<b>フィルタの効果は無い</b></li> <li>実モニタリングデータから、フィルタの効果が無いセル端の端末の比率は、<b>全体の6%</b></li> </ul>

## (参考) 通信不可事象の解消方法

---

被干渉側基地局において通信できなくなることが解消する方法は、他社移動局が移動し、被干渉基地局から70m以上離れる場合や、被干渉基地局との間に建物等の遮蔽物がある場所への移動、与干渉側基地局との見通し確保等による、通信環境の改善（送信電力の低減）等があります。

万が一、高電力の入力により基地局の故障が発生した際には、装置交換が必要となる場合もあります。

---

# 參考資料

# 参考 1. 実測評価シナリオ① (A-4) 評価結果

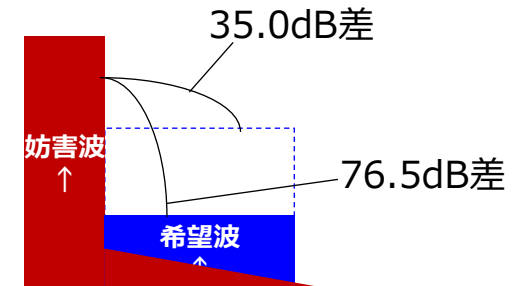
- 希望波と妨害波の電力比を固定して、妨害波電力を変化させた場合のスループットの劣化量について評価を実施しました。（電力比43.5dBは本編に掲載。参考ではそれ以外の電力比35.0dB、76.5dBについて示します。）

【希望波と妨害波の電力比：35.0dB】

【希望波と妨害波の電力比：76.5dB】



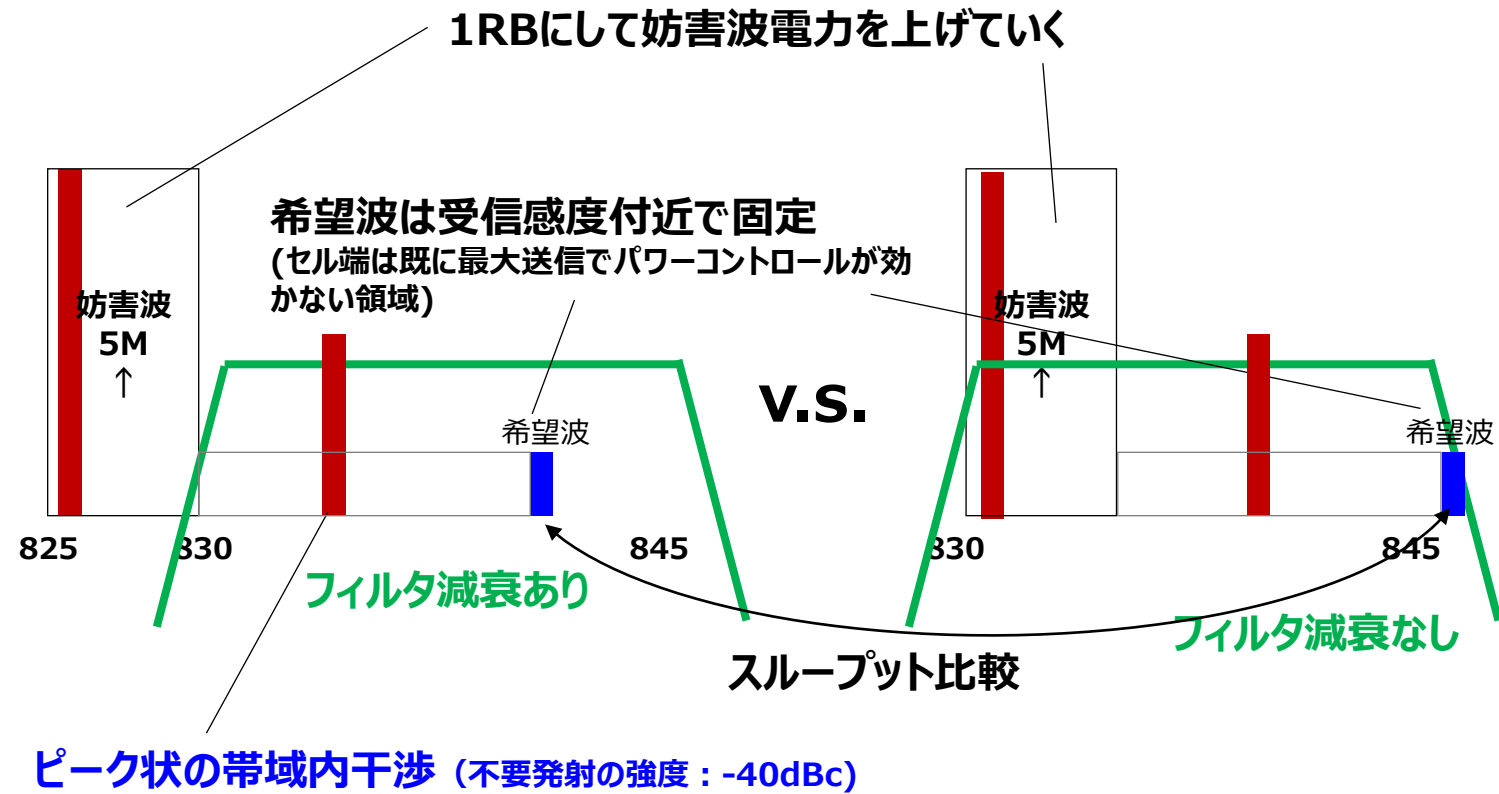
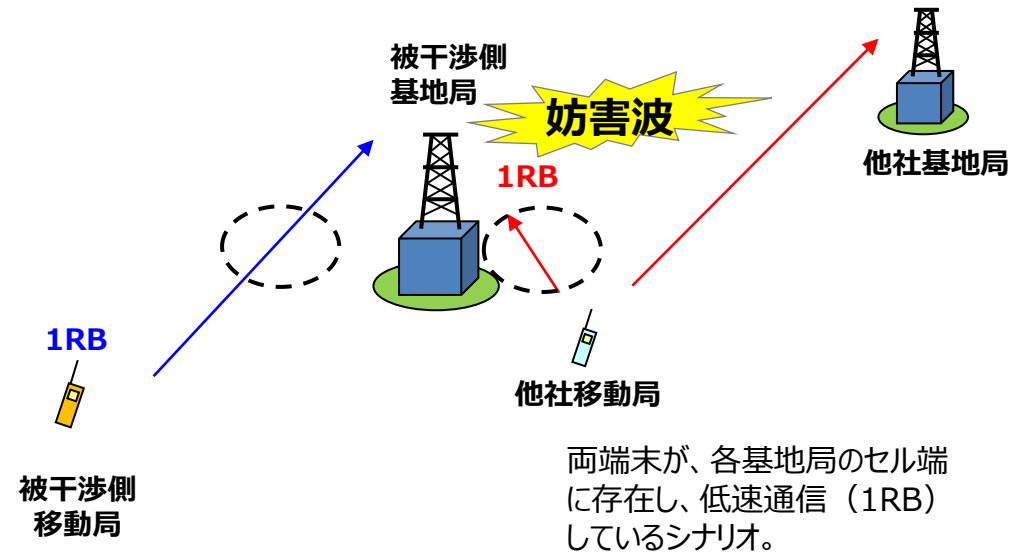
- 希望波と妨害波の電力比が35.0dBの場合、**フィルタ無し**の場合は、**妨害波電力が-40dBm以上の場合にスループットが低下します。**
- 一方、**フィルタ有**の場合は、**スループットの低下は見られず、フィルタの効果により、妨害波への耐性が6dB向上します。**



# 参考2-1. 実測評価シナリオ② (B-1) 評価内容

- セル端の被干渉端末への影響を、以下のシナリオに基づいて評価しました。

## 実測評価シナリオ②シチュエーション



## 参考 2 - 2. 実測評価シナリオ② (B-1) 評価結果 (1 / 2)

- 希望波電力を受信感度点に固定し、妨害波電力を変化させた場合のスループットの劣化量について評価を実施しました。

非開示資料

- フィルタ無しの場合は、妨害波電力が-40dBm以上の場合にスループットが低下します。
- 一方、フィルタ有の場合は、スループットの低下度合いは小さく、フィルタの効果により、妨害波への耐性が向上します。



## 参考 2 - 3. 実測評価シナリオ② (B-1) 評価結果 (2 / 2)

- データ通信に係るお客様影響の算出のため、条件 1 における妨害波電力に対する受信感度の劣化量の評価を実施しました。

【条件 1 (データ通信影響)】

【BLER = 5 % の場合の受信感度劣化】

非開示資料

受信感度 : -115.5dBm/180kHz に対する劣化量

【BLER = 20% の場合の受信感度劣化】

非開示資料

- 妨害波電力が -34dBm の場合、フィルタ無しでは装置が妨害波に耐えられないため、全端末でデータ通信できなくなりますが、フィルタ有では、データ通信が可能となります。

## 参考3-1. 実測評価シナリオ③ (B-2) 評価結果 (1 / 2)

- データ通信に係るお客様影響の算出のため、条件1における妨害波電力に対する受信感度の劣化量の評価を実施しました。(BLER=20%の結果は本編に掲載。参考ではそれ以外のBLER=5%の結果およびBLER=20%の考察について示します。)

【条件1 (データ通信影響)】

【BLER = 5%の場合の受信感度劣化】

非開示資料

受信感度：-115.5dBm/180kHzに対する劣化量

【BLER = 20%の場合の受信感度劣化】

非開示資料

- 妨害波電力が-38dBmの場合、フィルタ無しでデータ通信するためには、フィルタ有に比較して4dB高い受信電力が必要です。
- 妨害波電力が-38dBmより大きい場合、フィルタ無しでは装置が妨害波に耐えられないため、全端末でデータ通信できなくなりますが、フィルタ有では、データ通信が可能となります。

## 参考3-2. 実測評価シナリオ③ (B-2) 評価結果 (2/2)

- 妨害波電力が-38dBm及び-34dBmの場合に着目し、この場合のお客様影響を、各基地局において**データ通信ができなくなる端末比率**の累積分布として評価しました。

【条件1 (データ通信影響)】

【妨害波電力：-38dBmの場合】

非開示資料

【妨害波電力：-34dBmの場合】

非開示資料

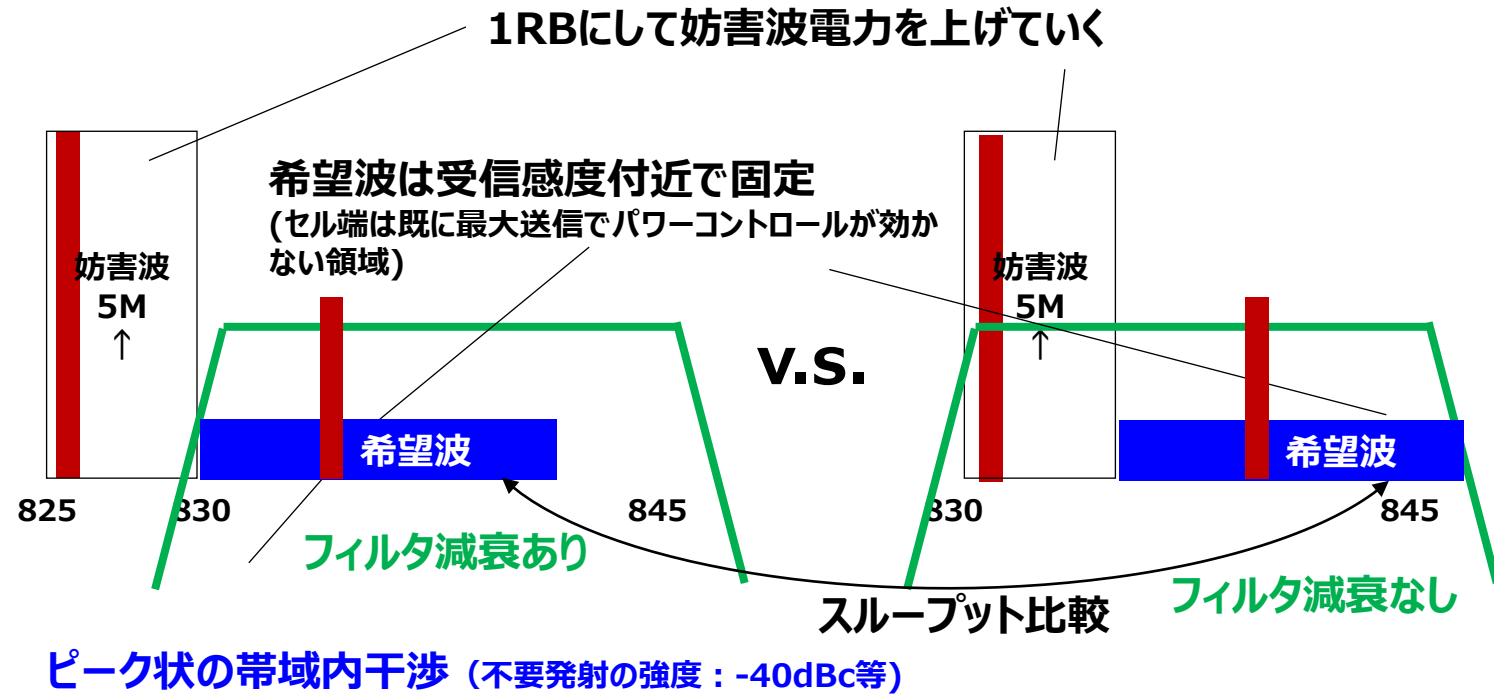
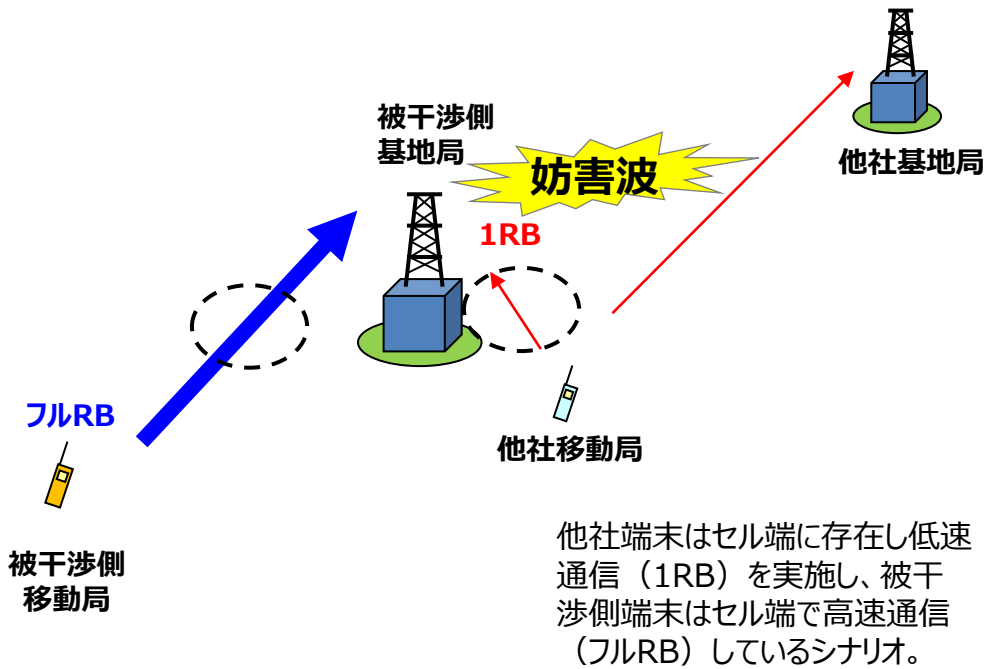
- 妨害波電力が-38dBmの場合、中央値で評価した結果、**フィルタ有の場合にはデータ通信できないセル内の端末の割合は9%**であり、一方、**フィルタが無い場合には、フィルタ有と比較して、9%多くの端末がデータ通信できなくなります。**
- 妨害波電力が-34dBmの場合、**フィルタが無い場合には、装置が妨害波に耐えられないため全端末がデータ通信できなくなりますが、フィルタ有の場合は、82%の端末でデータ通信が可能となります。**

# 参考4-1. 実測評価シナリオ④ (B-3) 評価内容

- セル端の被干渉端末への影響を、以下のシナリオに基づいて評価しました。

実測評価シナリオ④シチュエーション

希望波電力： -98.5dBm/9MHz  
 (-101.5dBm/4.5MHz)  
 妨害波電力： -70dBm～



## 参考4-2. 実測評価シナリオ④ (B-3) 評価結果 (1 / 2)

- 希望波電力を受信感度点に固定し、妨害波電力を変化させた場合のスループットの劣化量について評価を実施しました。

非開示資料

- 妨害波電力が-45dBmを超えた場合、フィルタの有無に関わらずスループットが低下します。

## 参考4-3. 実測評価シナリオ④ (B-3) 評価結果 (2/2)

- データ通信に係るお客様影響の算出のため、条件1における妨害波電力に対する受信感度の劣化量の評価を実施しました。

【条件1 (データ通信影響)】

【BLER = 5%の場合の受信感度劣化】

非開示資料

受信感度：-98.5dBm/9MHzに対する劣化量

【BLER = 20%の場合の受信感度劣化】

非開示資料

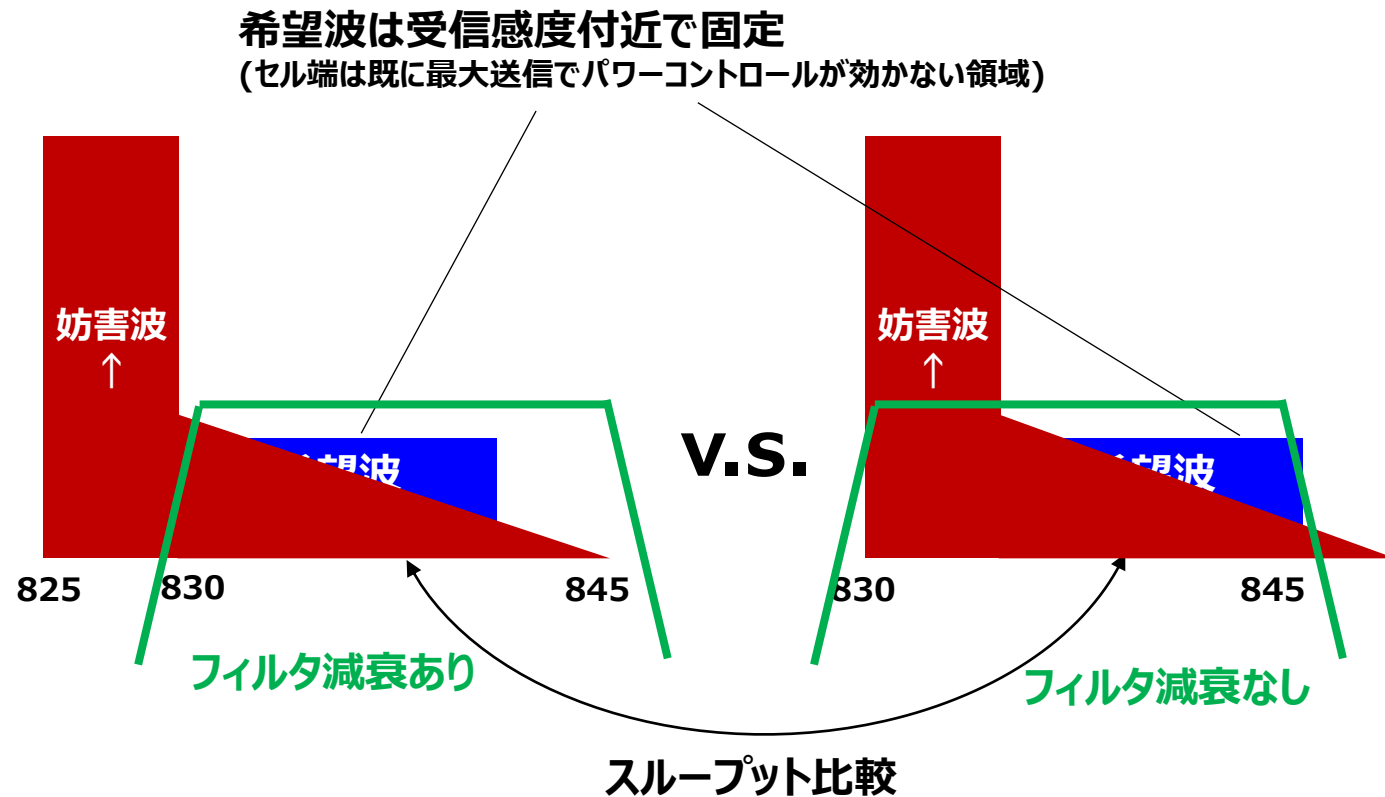
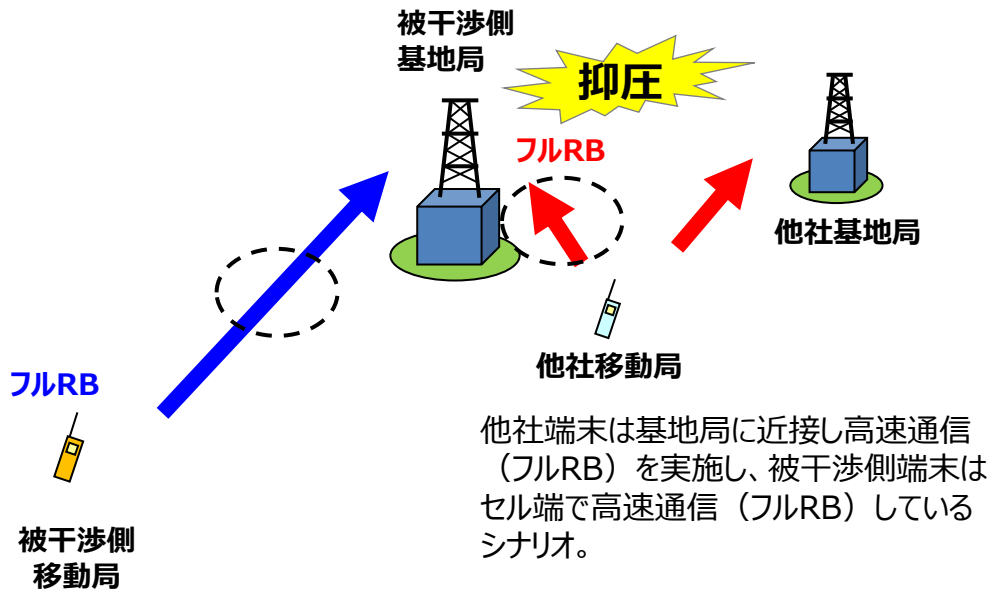
- 妨害波電力が約-40dBmの場合、フィルタ有無共に受信感度の劣化は0dBであり、お客様影響はありません。

# 参考5-1. 実測評価シナリオ⑤ (B-4) 評価内容

- セル端の被干渉端末への影響を、以下のシナリオに基づいて評価しました。

希望波電力： -98.5dBm/9MHz  
 (-101.5dBm/4.5MHz)  
 -92.5dBm/9MHz  
 (-101.5dBm/4.5MHz+6dB)  
 妨害波電力： -70dBm～

## 実測評価シナリオ⑤シチュエーション



## 参考5-2. 実測評価シナリオ⑤ (B-4) 評価結果 (1 / 3)

- 希望波電力を受信感度点に固定し、妨害波電力を変化させた場合のスループットの劣化量について評価を実施しました。

【希望波：受信感度】

【(参考) 希望波：3GPPの測定条件 (受信感度 + 6dB)】

非開示資料

非開示資料

- 妨害波電力が-58dBmを超えた場合、フィルタの有無に関わらずスループットが低下します。
- 装置が3GPP準拠の能力を有することを評価**するため、希望波電力を3GPPの測定条件である受信感度 +6dBとしてスループットを評価しました。3GPP測定条件である妨害波電力が-52dBmの場合において、スループットは100%を示すことから、**装置は3GPP準拠の能力を有する**ことが分かりました。



## 参考5-3. 実測評価シナリオ⑤ (B-4) 評価結果 (2/3)

- データ通信に係るお客様影響の算出のため、条件1における妨害波電力に対する受信感度の劣化量の評価を実施しました。

【条件1 (データ通信影響)】

【BLER = 5%の場合の受信感度劣化】

非開示資料

受信感度：-101.5dBm/4.5MHzに対する劣化量

【BLER = 20%の場合の受信感度劣化】

非開示資料

- 妨害波電力が-41dBmの場合、フィルタ無しでデータ通信するためには、フィルタ有に比較して4dB高い受信電力が必要です。
- 妨害波電力が-41dBmより大きい場合、フィルタ無しでは装置が妨害波に耐えられないため、全端末でデータ通信できなくなりますが、フィルタ有では、データ通信が可能となります。

## 参考5-4. 実測評価シナリオ⑤ (B-4) 評価結果 (3 / 3)

- 妨害波電力が-41dBm及び-37dBmの場合に着目し、この場合のお客様影響を、各基地局において**データ通信ができなくなる端末比率**の累積分布として評価しました。

【条件1 (データ通信影響)】

【妨害波電力：-41dBmの場合】

非開示資料

【妨害波電力：-37dBmの場合】

非開示資料

- 妨害波電力が-41dBmの場合、中央値で評価した結果、**フィルタが有の場合にはデータ通信できないセル内の端末の割合は約10%**であり、一方、**フィルタ無の場合にはフィルタ有と比較して約13%多くの端末がデータ通信ができなくなります。**
- 妨害波電力が-37dBm程度の場合、**フィルタが無い場合には、装置が妨害波に耐えられないため全端末がデータ通信できなくなります**が、**フィルタ有の場合には、70%の端末でデータ通信が可能となります。**